

4章 海外実演団体運営状況調査

4章 海外実演団体運営状況調査

1. 概要

バレエ団を取り巻く社会や経済環境は刻々と変化しており、バレエ団や実演団体の運営はそうした様々な流れに対応するため、日々判断を求められている。世界のバレエ団は運営にあたって類似の問題を共有していることも多く、海外と日本のバレエ団が同様の課題に対して対応を求められることも多い。海外のバレエ団や実演団体がいかに様々な問題に対応しているかは、日本のバレエ団運営にとって参考となることが多いが、日本のバレエ団は小規模の人員体制で組織運営を行っており、海外の状況を調査するための余裕はない。上記の状況をふまえ、本調査では日本のバレエ団スタッフが日々の運営で活用できると思われる海外実演団体の情報を収集し、レポートとしてまとめ、隔週でタイムリーに提供した。本調査を通じてバレエ団運営スタッフの知見を広げ、スタッフ育成を行うことが目的である。

<実施概要>

運営スタッフ向け「海外実演団体運営状況調査」

- レポート発行対象：日本バレエ団連盟会員団体（9団体）の運営スタッフ
- レポート発行時期：2022年5月～2023年3月（2週に1回2400字程度のレポートを発行）
- 調査協力：昭和音楽大学バレエ研究所

2. 調査方法

- 新聞や雑誌等の報道を対象として調査を行った。
- 英語メディアを中心に調査を行ったため英語圏のニュースが中心である。しかしフランス語、スペイン語、イタリア語等の報道もできるだけ参考とした。
- メディアの報道だけでなくバレエ団や関連団体、調査団体の公式ウェブサイトやSNS等も調査対象とした。
- バレエ団経営やバレエを取り巻く社会情勢に関わる情報を中心に選択し、レポート作成を行った。
- バレエ公演評等はあえて調査対象から外した。本レポートはあくまでバレエ団運営や経営に関して有用な情報を提供することが目的である。公演内容等については日本語での記事がすでに専門誌等の、他の媒体から出版されている。本調査は日本語での情報がほとんどないバレエ団運営や経営について、海外の動向を関係者に伝えることを目的としている。
- バレエはそれを取り巻く社会の影響を大きく受けている。日本のバレエ関係者が、海外のバ

バレエ団がいかに社会情勢に対応しているかを把握できるよう、特に社会情勢に関する記事は積極的に扱った。

- バレエだけでなくオペラやミュージカルなど、関わりのある芸術ジャンルの団体運営や経営についても調査対象とした。
- バレエ団運営は各国の文化政策にも大きく影響を受けている。各国の文化政策等で注視すべきと思われるニュースがあれば、それも調査対象とした。

<調査を行ったウェブサイト>

新聞、テレビ、業界誌、ネットメディア等

ABC

BBC

Classic FM

CNBC

Corriere Della Sera

Daily Mail

Dance Europe

Financial Review

The Financial Times

France 24

The Guardian

Gramilano

Industry Research

The Independent

The New York Times

Pointe Magazine

POPSUGAR BEAUTY

Reuters

RFI

The Sydney Morning Herald

SRF

The Stage

Stuff

The Spectator

Teen Vogue

The Washington Post

Yonhap News

上記に加えてバレエ団や芸術団体、また政府系団体の公式ウェブサイトやSNSなども調査対象とした。

3. 発行レポート概要

(2023年1月31日時点)

発行日	トピックス
2022年 5月2日	<ul style="list-style-type: none"> ・ポリショイ・バレエ団がロシア軍支援のための公演を開催（ロシア） ・劇場界はロックダウン下で行ったコミュニティ向けのプロジェクトを維持すべき（英国） ・戦争によってロシアの有名バレエ団との間に再び鉄のカーテンが下りた（ロシア） ・ポワントで踊るノンバイナリーの白鳥（米国） ・インティマシー・ワークショップを通じてバレエにも同意を（英国）
5月17日	<ul style="list-style-type: none"> ・ロイヤル・バレエ学校が小学校向けのオンラインダンスレッスンを開始（英国） ・「ご機嫌いかが？」21世紀のパレエ界において紳士であるには（米国）
5月23日	<ul style="list-style-type: none"> ・スーザン・ジャフィがバレエ界の考え方を一新する（米国）
6月14日	<ul style="list-style-type: none"> ・世界のバレエ公演市場は向こう10年間で年平均16.8%の回復が見込まれる（米国） ・ダンサーが触れる時：身体的接触の多い芸術において真の同意を得るには（オーストラリア）
6月28日	<ul style="list-style-type: none"> ・チケット額調査：パンデミック前と比較し、最高価格帯のチケット額が約20%上昇（英国） ・ブロードウェイでは観客のマスク着用義務が撤廃（米国）
7月12日	<ul style="list-style-type: none"> ・過酷な訓練、プレッシャー、大騒ぎ：バレエにこういったものは必要なのか？（スイス） ・チューリヒ・ダンス・アカデミー「あなたは踊るハンバーガーみたい」（スイス）
7月26日	<ul style="list-style-type: none"> ・ロイヤル・ニュージーランド・バレエが初めて同性同士のキスシーンを上演。古典作品の現代的読み替えで（ニュージーランド） ・多様性を重視するため、英国トップのダンス学校がバレエを入学試験科目から除外（英国）
8月9日	<ul style="list-style-type: none"> ・バレエが人種差別的である、またはトランスジェンダーに対して差別的であると信じる愚かな人々を哀れに思う（英国） ・Dance/NYCは新たな全体調査を行い、ニューヨークで働く全てのダンス関係者を調査の対象とする予定（米国）
8月23日	<ul style="list-style-type: none"> ・舞台芸術が帰って来た。しかし観客はまだ戻って来ていない（米国）
9月6日	<ul style="list-style-type: none"> ・ゼンパー・オーバー・ドレスデン・バレエ団のダンサー、レベッカ・ハウがバレエダンサーの事務所を設立（欧州、米国） ・オーストラリア・バレエ団が寄付金集めに成功し、2023年は素晴らしい年となる予定（オーストラリア）
9月20日	<ul style="list-style-type: none"> ・爆撃からバレエへ：ウクライナ人ダンサーがロンドンで『ジゼル』公演を開催（英国） ・ニューヨーク・シティ・バレエ団ダンサーは契約更新で、昇給と労働安全基準の向上を勝ち取った（米国）
10月4日	<ul style="list-style-type: none"> ・オーストラリアでは多数の素晴らしい公演が開催予定。しかしどうして人々はチケットを買わないのか（オーストラリア）
10月18日	<ul style="list-style-type: none"> ・バレエ団友の会（英国、北米） ・ミラノ・スカラ座の公演は満員御礼だったりガラガラだったり。コロナのせいかな金欠のせいかな？（イタリア）

発行日	トピックス
2022年 11月1日	<ul style="list-style-type: none"> ・パンデミック後、映画と比べて劇場の観客は戻りが遅め（英国） ・ニューヨーク・シアター・バレエに新監督が就任 新たな層の観客発掘を狙う（米国）
11月15日	<ul style="list-style-type: none"> ・イングリッシュ・ナショナル・オペラが本拠地をロンドンの外へ移転。新制度の助成金で（英国） ・なぜアーツ・カウンシルはイングリッシュ・ナショナル・オペラとイングリッシュ・ナショナル・バレエにとどめを刺さないといけないか（英国）
11月29日	<ul style="list-style-type: none"> ・オペラがその声を失う時（英国） ・タマラ・ロホ：バレエ界のスターがイングランド・アーツ・カウンシルの決定を批判（英国）
12月13日	<ul style="list-style-type: none"> ・フランスのダンス教師が辞職。大学生とジェンダー論争の末（フランス） ・ボディ・シェイミングがまだバレエ業界では堂々に行われている：プリンシパルダンサーのアシュリー・ボーダーはニューヨーク・シティ・バレエ団の闇について話した。劇場幹部は外見を理由として、彼女に出演辞退を勧めた（米国）
12月27日	<ul style="list-style-type: none"> ・イスラム教徒向けバレエレッスンの内容は…？（英国） ・虐待問題：バーゼルのバレエ学校がプロ育成コースを閉鎖（スイス） ・キャンセルカルチャー：人種差別的であるとの理由でノイマイヤー振付『オセロ』の上演がコペンハーゲンで中止（デンマーク）
2023年 1月10日	<ul style="list-style-type: none"> ・ロシアの国立バレエ団が9月に韓国で『白鳥の湖』公演を開催（韓国） ・ミラノ・アルチンボルディ劇場がプーチン支持者であるボルネンの公演を中止（イタリア） ・オーストラリア・バレエ団がいかにダンサーの怪我発生率を下げたか（オーストラリア）
1月24日	<ul style="list-style-type: none"> ・バレエはキャサリンの人生の全てだったが、それによって何年にもわたって苦しんだ。しかし新しい世代はもっとましだろうと信じている（オーストラリア） ・2023年ゴールデン・グローブ賞ではバレリーナ風お団子ヘアが流行中（米国） ・2022年にブームとなったファッショントレンド：バレエコア（balletcore）、バービーコア（barbiecore）、シアーなど（米国）

※ 2023年2月7日、2月21日、3月7日、3月20日にも発行予定

<海外実演団体運営対応状況概要>

以下は本年度に発行した「海外実演団体運営状況調査」の概要である。まず月ごとの概観を述べた後、地域別ニュースのまとめを記述した。

本調査はメディア記事を元にして作成しているため、実際の事件発生からレポートの掲載まで時間差がある。そもそもメディアによる報道は事件後に作成されるものであるが、本レポートはすでに発行された報道を情報元として作成されているため、事件発生から本調査に掲載されるまではさらに時間が経過する。例えばその事柄が6月に発生したとしても、7月や8月の「海外実演団体運営状況調査」に掲載されている場合も多くある。本概要はあくまでも「海外実演団体運営状況調査」の概要であるため、例えば6月に起きた事件等であっても、調査では7月に掲載された内容であれば、7月のものとして記載した。

2022年5月

概観：2022年2月に始まったロシアのウクライナ軍事侵攻によって、世界のバレエ界は大きく様変わりをした。軍事侵攻以前からロシアは世界のバレエ界において大きな存在感を誇っており、また海外との交流も頻繁にあった。しかしウクライナ軍事侵攻が起こってから世界のバレエ界はロシアとロシア外で分断され、それぞれで異なる潮流が生まれた。

ロシア内ではバレエ団によるロシア軍支援の公演が開催された。また同時に、軍事侵攻に反対するバレエ団ダンサーらがロシア外に移籍する流れも生まれた。

ロシアの外では「パンデミック後」について語る報道が増加した。例えば英国の業界紙The Stageに掲載されたコラムは、コロナ禍で広まったオンラインワークショップ等の活動は、パンデミック後も継続すべきであると主張している¹。英国ロイヤル・バレエ学校はオンラインのバレエレッスンを始め、また若年層に向けた試験制度も改革を行った。

コロナ禍において米国で起きた#metoo運動は、ロシア外、特に米国やヨーロッパの国々におけるバレエや舞台芸術にも影響を与えている。ノンバイナリーのダンサーの登場、異性愛がテーマとなることがほとんどであるバレエ作品へ疑問が提示されるなど、新たな動きがバレエ界で起こっている。

また性的な場面や暴力的な場面が含まれるバレエ作品において、出演するダンサーらがきちんと同意した上で作品を上演できるよう、バレエ界におけるインティマシー・コーディネーターの導入が始まった。

米国の大規模なバレエ団においては、今まで監督のほとんどが男性だったが、ここに来て女性の芸術監督が就任する例が相次いでいる。アメリカン・バレエ・シアターではスーザン・ジャフィが2022年9月より芸術監督となるが、現代の価値基準では問題と思われる点を含む古典作品の見直し、またバレエ作品への理解を深めるため観客に向けた動画制作など、様々な計画を準備しているという。

ロシア

世界でも最も著名なバレエ団のひとつであるボリショイ・バレエ団は、ロシア軍支援を目的とした公演をモスクワのボリショイ劇場で開催した。上演された演目は『スパルタクス』で、亡くなった兵士の家族を支援するという。

ロシアのウクライナ軍事侵攻がどんな影響をバレエ界に及ぼしたかについて、オランダ国立バレエ団のブランセン監督はニューヨーク・タイムズ紙に向けて「冷戦時代に逆戻りしたような状況だ」と述べている²。ウクライナ軍事侵攻前の数年間、ボリショイ・バレエ団はリベラルで実験的な作品の上演にも意欲的だったが、ウクライナ軍事侵攻を契機に、保守的なレパートリーに逆戻りするのではないかと見られている。プ

1 “Theatres should be queuing up to support lockdown community projects” The Stage (28/03/2022)
<https://www.thestage.co.uk/opinion/lyn%20gardner%20theatres%20should%20be%20queuing%20up%20to%20support%20lockdown%20community%20projects>

2 “War brings new Iron Curtain down on Russia’s storied ballet” New York Time (15/04/2022)
<https://www.nytimes.com/2022/04/15/arts/olga-smirnova-ballet-bolshoi-ukraine-war.html>

リンストン大学のサイモン・モリスン教授は、同紙に向けてポリショイ・バレエ団は「レパトリーの枯渇」に悩むのではないかと述べた³。

またポリショイ・バレエ団プリンシパルのオリガ・スミルノワは2022年3月に、戦争に反対すると述べた後、オランダ国立バレエ団に移籍した。

英国

コロナ禍では自宅を離れることが難しい人に向けてのオンラインダンスレッスンが開講されるなど、草の根レベルでは様々な取り組みが行われた。そうした活動は人々のニーズに応えるものであり、パンデミック後も止めるべきではないというコラムが業界紙The Stageに掲載された⁴。またロイヤル・バレエ学校はオンデマンドのダンスプログラムを開始した。

インティマシー・コーディネーターは性的、あるいは暴力的な場面のある作品において、出演者がきちんと同意した上で演技ができるよう、リハーサルの現場で様々な対策を行う。映画界では一般的な存在であったが、ここ数年でバレエ界においてもインティマシー・コーディネーターの導入が進んでいる。カナダ国立バレエ団、アメリカン・バレエ・シアター、ランベール・ダンス・カンパニー、スコティッシュ・バレエなどではすでに導入が行われている。例えばマクミラン振付『マイヤリング』のような作品では、そうした存在がダンサーらを守ることになるだろうと言われている。

北米

シアトルのパシフィック・ノース・ウェスト・バレエ団では4月に開催される『白鳥の湖』公演において、ノンバイナリーのダンサーが白鳥の群舞で出演予定である。アシュトン・エドワーズは男性として生まれたノンバイナリーであり、ポワントを履いて、従来は女性が踊る役を日常的に踊っている。同バレエ団にはエドワーズだけでなく、他にもノンバイナリーのダンサーが在籍している。しかしながら逆のパターンとして、女性として生まれたジェンダー・ノンコンフォーミングのダンサーが、伝統的に男性のものとしてきた役柄を踊っているケースはほとんど存在しない。

ニューヨーク・シティ・バレエ団プリンシパルのラッセル・ジャンゼンは、バランシン作品に内在する異性愛の要素や男らしさの要素に対して、きまり悪さを覚えることがあったとニューヨーク・タイムズ紙に向けて書いている⁵。バレエ界でいかに「紳士的」であるかについて、悩んだという内容だ。記事では、作者はダンスの中にある異性愛の要素から距離を置きつつ、同時に相手に対する思いやりこそが重要なのではな

3 Ibid.

4 “Theatres should be queuing up to support lockdown community projects” The Stage (28/03/2022)
<https://www.thestage.co.uk/opinion/lyn%20gardner%20theatres%20should%20be%20queuing%20up%20to%20support%20lockdown%20community%20projects>

5 “On Being a Gentleman in 21st Century Ballet” New York Times (04/05/2022)
<https://www.nytimes.com/2022/05/04/arts/dance/gender-roles-ballet-russell-janzen.html>

いか、と語っている。

スーザン・ジャフィは2022年9月のシーズンからアメリカン・バレエ・シアターの芸術監督に就任予定だ。米国における3大バレエ団はニューヨーク・シティ・バレエ団、アメリカン・バレエ・シアター、サンフランシスコ・バレエ団であるが、サンフランシスコ・バレエ団芸術監督にはタマラ・ロホが就任するので、3大バレエ団のうち2つのバレエ団で女性が芸術監督の座に就くこととなる。従来は男性が大規模なバレエ団の要職を占めてきたので、この状況は歴史的な転換点である。またジャフィは、『海賊』や『ラ・バヤデー』のような、現代的な観点から鑑みて問題があると議論されている古典作品に関して、改訂を行う予定があると述べた。一般の観客に向けて、バレエ作品への理解を促すような、動画の制作も予定していると述べた。

2022年6月

概観：5月の調査に引き続き、パンデミック後の劇場界概況に関する話題が多かった。コロナ禍からの劇場界の回復に関する記事があった。Industry Researchは、世界のパレエ公演市場は向こう10年、年平均で16.8%ずつ回復するだろうと述べている⁶。また英国・ウェストエンドを対象としたチケット額調査においては、2022年のチケットの最高額が、2019年時点での最高額を20%上回るという結果が発表された。

米国・ニューヨークのブロードウェイでは、劇場内での観客のマスク着用義務が撤廃された。先月に引き続き、バレエ界におけるインティマシー・コーディネーター導入が話題となった。米国、英国に続き、オーストラリアでもその動きが出て来ているという。

英国

業界紙The Stageがロンドン・ウェストエンドの劇場を対象にしてチケット価格の調査を行った⁷。最高価格帯のチケット平均価格は140.85英国ポンドで、2019年と比較して20%値上がりしている。新作の上演が相次いだことが原因と思われる、ロングランの公演ではチケット価格は下がっている、同時に最低価格帯のチケット価格平均は22.56英国ポンドで、2019年と比較して大きな変動はない。政府から助成を受けている劇場の中で、最も安いチケットを提供しているのはロイヤル・オペラ・ハウスであり、10英国ポンドだった。

6 “Ballet Performance Market Size (2022-2028) By 16.8% of Growing CAGR” Industry Research Biz (10/06/2022)
<https://www.globenewswire.com/news-release/2022/06/10/2460230/0/en/Ballet-Performance-Market-Size-2022-2028-By-16-8-of-Growing-CAGR-Trends-Evaluation-Leading-Players-Updates-Consumer-Demand-Consumption-Recent-Developments-Strategies-Gross-Margin-C.html>

7 “The Stage ticketing survey 2022: the data in full” The Stage (23/06/2022)
<https://www.thestage.co.uk/features/the-stage-ticketing-survey-2022-the-data-in-full>

北米

世界のバレエ公演市場規模はコロナ禍で大きく縮小し、2022年時点で298.2百万米ドルほどと試算されている。しかし年平均で16.8%ずつ回復するだろうとの見方が提示された。ヨーロッパが最大の市場であり、過半数を占める。上演作品は古典バレエ公演が全体の75%である⁸。

現在ニューヨーク市内にある41の劇場で観客のマスク着用は義務であるが、7月1日から任意となる。しかし観客には引き続きマスク着用が推奨されている。

その他の地域

英国や米国では性的な場面や暴力的な場面を含む作品をバレエ団が上演する際、ダンサーを守るためにインティマシー・コーディネーターの導入が進んでいる。ダンスはそもそも身体的接触が多く、加えて言葉を使わないので、ダンサーは対話することに慣れていない。上演作品には性的な要素が含まれているものもある。オーストラリアのバレエ団やダンスカンパニーにおいては、まだ外部のインティマシー・コーディネーターの導入は行われてはいないが、新たな取り組みは始まっているという。例えば性的な場面では、参加する全員が振付に同意をし、それを厳格に守るかたちで行う団体もある。

2022年7月

概観：#metooの流れはバレエ界に引き続き大きな影響を与えている。スイスのチューリヒ・ダンス・アカデミーは卒業生の就職率が高く、成果を出しているということも可能だが、しかしバレエ学校の教育方針に対して虐待であるという強い批判が起こった。成果は虐待に近い教育を正当化するのか、と言った文脈で議論されている。厳しい教育は教師側の権力の濫用にあたるという声もある。

古典バレエの提示する伝統的価値観への疑問も高まっている。ニュージーランドでは新制作『シンデレラ』において、男性同士がキスする場面が上演された。

またバレエやバレエ教育は、ヨーロッパにおいては、伝統的に富や白人文化と結びつけられることが多い。英国では、そうした基準にあてはまらない人々を阻害しないため、という理由で、コンテンポラリー・ダンスの学校が入学オーディションでバレエを審査項目から外した。

欧州

スイス・チューリヒにあるチューリヒ・ダンス・アカデミーは就職率80%を誇るバレエ学校だが、元生徒13名が、ダンスアカデミー経営陣と6名のバレエ教師を虐待で告発した。虐待の内容は心理的、身体的虐待や体型批判等である。その結果、拒食症を発症した元生徒や、不安障害や鬱を患いまだ投薬を続けている元生徒もいるとい

8 Ibid.

う。体型管理についても、生徒のBMIは16から18である必要があると指示されているが、それは一般的には低体重とされる数値である。記事によれば教師は「東側」の過酷な訓練を生徒に強いており、また告発されたうち2名の主任教官のオフィスは、「東ドイツ最後の土地」と揶揄されていたという⁹。

英国

リーズにあるノーザン・スクール・オブ・コンテンポラリー・ダンスは専門的にダンスを学ぶことのできる機関で、学位の取得も可能であるが、「多様な背景を持った学生に入学してもらうため」という理由でバレエを入学オーディションの項目から外す決定をした。記事内では、バレエは富と関連づけて考えられることが多い芸術であり、またプロとなるダンサーの多くは白人の中流階級かアッパーワーキングクラス以上の出身である、という主張も紹介されている¹⁰。それに加えて、ノーザン・スクール・オブ・コンテンポラリー・ダンスではダンサーのジェンダーを示す際に、him（彼）やher（彼女）でなく、they（彼ら）を使うと回答した。

その他の地域

2022年8月に公開されるロイヤル・ニュージーランド・バレエ団の新制作『シンデレラ』では、あらすじが変更され、王子同士が恋に落ちる設定となっている。バレエ団史上初めて、同性同士のキスシーンを上演することになるという。『シンデレラ』は伝統的な価値観に基づいたストーリーであるが、本作でそれを打破することを目的としているという。

2022年8月

概観：米国では劇場が再開しパンデミックも終わったかに思えるが、しかしチケットの売り上げ水準が戻るスピードは、関係者らが予想したより大きく遅れている。ニューヨーク・ブロードウェイやオペラハウス、地方オーケストラ、クラシック音楽や演劇など、幅広いジャンルで、パンデミック以前と比較してチケットの売上が低迷している。

ニューヨークの非営利団体がダンス関係者を対象に、パンデミックがダンス関係者にどのような影響があったかについて調査を行った。2021年の同調査では、ダンス関係者の多くが家賃にも困り、また無職であると回答した。

英国では、ノーザン・スクール・オブ・コンテンポラリー・ダンスがバレエを入試オーディションの選考科目から外したことに対して、それを批判する記事が保守系の雑誌スペクテイターに掲載された¹¹。ノーザン・スクール・オブ・コンテンポラリー・アーツはあまりにも

9 “Drill, Druck, Drama: Brauchen wir dieses Ballett?” SFR(13/06/2022)
<https://www.srf.ch/kultur/gesellschaft-religion/tanzakademie-zuerich-drill-druck-drama-brauchen-wir-dieses-ballett>
 10 “Ballet dropped as audition requirement at top UK dance school in diversity drive” Classic FM(19/07/2022)
<https://www.classicfm.com/discover-music/periods-genres/ballet/auditions-diversity-dance-school/>
 11 “I feel sorry for those stupid enough to believe that ballet is racist or transphobic” The Spectator (06/08/2022)
<https://www.spectator.co.uk/article/i-feel-sorry-for-those-stupid-enough-to-believe-that-ballet-is-racist-or-transphobic/>

ウォーク (Woke) であるという理由である。Wokeは俗語で、社会問題等に対して敏感でありいわゆる「意識が高い」、または「意識が高すぎる」といった意味あい使われる。

英国

英国の保守系週刊誌「スペクテイター」は、英国・リーズのノーザン・スクール・オブ・コンテンポラリー・ダンスがバレエを入試科目から外した件に関して、強く批判する記事を掲載した。「ウォーク (Woke)」の流れに乗っている、という理由である¹²。バレエはヨーロッパ上流階級の男性に向けて作られたものだと論じるならば、ほとんどの芸術はそれにあてはまる。またバレエが人種差別的だというならば、ロイヤル・バレエ団が様々な人種のダンサーを擁していることをどう説明するのか。加えてバレエが性差別的だというならば、ニジンスキーの中性的な魅力をどう説明するのか、といった内容だ。

北米

非営利団体Dance/NYCが2021年3月にニューヨークで働くダンス関係者約1000名を対象として調査をしたところ、72%が家賃を払う資金が必要だと回答し、75%が2020年3月以来無職だと回答した¹³。また特に先住民や有色人種のダンス関係者らが、パンデミックの影響を大きく受けたという。Dance/NYCは2022年にも同調査を行う予定である。

ニューヨーク・タイムズ紙は、米国では劇場閉鎖が終わり、公演が再開しているにも関わらず、舞台芸術はチケットの売れ行きが思わしくないと報じた¹⁴。北米の多くの芸術団体において、2021/2022シーズンのチケットの販売率が、パンデミック以前の2019年と比較して大きく下がっている。

ブロードウェイでの観客の入りはパンデミック以前の半分程度、メトロポリタン歌劇場では61%の入場率であった。特にパンデミック以前から定期会員減やチケット売上悪化に悩まされてきたクラシック音楽業界は、パンデミックでそれが悪化したという。またリモートワークが定着したことで、仕事帰りに劇場に立ち寄る機会も大きく減った。劇場での感染リスクを鑑み、観劇をためらっている層もいると考えられている。

反対に観客層が若い音楽の分野ではチケットの売上が好調だ。商業音楽の興行元であるライブ・ネイション社は、1年で1億枚以上のチケットを売り上げたと発表しており、それは2019年の販売枚数を超えている。

12 Ibid.

13 “In a New Census, Dance/NYC Wants to Count Every Dance Worker” The New York Times (13/07/2022)
<https://www.nytimes.com/2022/07/13/arts/dance/dance-nyc-census.html>

14 “Live Performance Is Back. But Audience have been slow to return.” The New York Times (21/08/2022)
<https://www.nytimes.com/2022/08/21/arts/performing-arts-pandemic-attendance.html?smtyp=cur&smid=tw-nytimesarts>

2022年9月

概観：バレエダンサーの雇用プロセスに変化が起こるかもしれない。バレエダンサーの就職を支援し、またバレエ団との労使交渉を支援する事務所が、ゼンパー・オーパー・バレエ団に所属する英国人ダンサーによって設立された。すでに米国のバレエ団で働くダンサーやフリーランスのダンサーらが事務所に登録をしている。同事務所はバレエ団のダンサー募集を支援する仕事を行うという。

英国・ロンドンでは、ウクライナ人ダンサーで構成されたユナイテッド・ウクライナ・バレエ団が、アレクセイ・ラトマンスキーによる新制作『ジゼル』を上演した。

オーストラリアではオーストラリア・バレエ団がファンドレイジングで大きな成功を収めた。ニューヨーク・シティ・バレエ団では経営陣と労働組合の交渉が行われ、パンデミック中に下げた給料を戻し、またニューヨークのインフレ率に合わせて昇給する決定がなされた。労働環境の向上も約束された。

欧州

ゼンパー・オーパー・バレエ団に所属する英国人ダンサーのレベッカ・ハウが、世界で初めてバレエダンサーのための事務所を設立した。自身が雇用契約締結や移籍で苦労した経験があり、そうしたプロセスを支援したいと考え設立したという¹⁵。プロダンサーのオーディション過程を支援するオンライン講座を制作するところから始め、現在はダンサーの代理人として年俸や労働時間の交渉を行う事務所を設立し、現在はプリンシパルからアーティストレベルのダンサー、またフリーランスも含め計17名が所属をしている。バレエ団のダンサー採用プロセス支援の仕事も始めた。

英国

ユナイテッド・ウクライナ・バレエ団はウクライナ人ダンサーや芸術スタッフらで構成されたバレエ団で、オランダを本拠地としている。9月にロンドンでアレクセイ・ラトマンスキー振付の新制作『ジゼル』を上演する予定だ。本バレエ団はダンサーに仕事や居場所を与え、またダンサーらが給料を得ることができるよう設立された。

北米

ニューヨーク・シティ・バレエ団では労働組合とバレエ団幹部の交渉の結果、ダンサーの昇給と労働環境の向上が決定された。コロナ禍において、ダンサーは4%の減給を受け入れていた。しかし今シーズンはニューヨークの物価上昇も鑑みたくて6.7%の昇給、また来シーズンはさらなる昇給が決まった。女性ダンサー、特に有色人種の女性ダンサーが安全に働くことができるよう、さまざまな措置が取られること

15 “Semperoper Dresden Dancer Rebecca Haw on Founding a Classical Ballet Agency” Point Magazine (02/09/2022) <https://pointmagazine.com/rebecca-haw-on-founding-a-classical-ballet-agency/>

となった。性的な要素を含む作品を上演する際には、インティマシー・コーディネーターが試験的に導入されることが決まった。ダンサーはタイツやシューズを選ぶ際にピンクを義務付けられることがなくなり、自身の肌の色にあったものを選ぶことができる。バレエ団側はバレエにおける人種的な、また民族的なステレオタイプを取り除くことも約束した。

その他の地域

オーストラリア・バレエ団は著名な慈善家やマードック一族から巨額の寄付金を集めることに成功した。ファンドレイジングで成功を取めた結果、2023年シーズンは新しい試みを行うことができ、また『白鳥の湖』を新制作する予定である。オーストラリア・バレエ団はコロナ禍の2シーズンにわたって、大きな損失を計上していた。

2022年10月

概観：オーストラリアやイタリアからは、劇場は再開しているのにも関わらず、チケットの売れ行きがパンデミック以前の水準に戻ってはいないというニュースがあった。どちらの地域でも消費者の行動パターンが変化し、多くの観客が公演直前になってチケットを購入するようになったという。経済状況の悪化によって、顧客らがチケットを買い渋っているという内容も共通していた。

世界のバレエ団友の会制度を概括した記事では友の会の重要性が論じられている。バレエ団経営や長期戦略を考えた際に、友の会は重要であるという内容だ。

欧州

イタリアのミラノ・スカラ座バレエ団ではチケットの売れ行きが芳しくない。パンデミック以前、常連客らは公演日のかなり前にチケットを購入していた。しかしこのところ、常連客は公演当日に売り出される割引チケットを待って購入するようになった。感染を恐れているため、また消費者の行動パターンがコロナ禍で変化したせいなど、理由は色々と考えられることができるが、一番は経済的なものだと考えられている¹⁶。物価や光熱費が高騰し、人々の生活が脅かされているため、チケットを購入する余裕がないためだ。また光熱費高騰は劇場経営にも大きな打撃があると考えられる。

英国

バレエの専門誌であるDance Europeは英国や欧州のバレエ団友の会制度を紹介したのち、バレエ団友の会はバレエ団と顧客の双方にとって利益のあるものだと論じている。会員はチケットの優先購入などの特典があり、バレエ団にとっては資金源である上、会員データはマーケティングにも有用だ。バレエ団の長期的経営を鑑みた際に、

16 “La Scala Ballet’s full and empty houses – Covid or cash?” Gramilano (09/10/2022)
<https://www.gramilano.com/2022/10/la-scala-ballet-full-and-empty-houses/>

友の会を軽視してはならない¹⁷。

その他の地域

オーストラリアの文化助成機関が観客の行動パターンについて調査を行ったところ、4人に1人がまだステイホームを続けていると答え、過去6ヶ月で劇場に足を運んだ観客のうち半分が、パンデミック以前ほど頻繁に劇場に行くことがなくなった、と回答した。また4人に1人が、経済的な理由で娯楽に資金を割くことができなくなったと回答した。オーストラリアの多くの芸術団体が、観客が公演直前にチケットを購入することが増えたと述べている。観客の行動パターンに関する調査でも、25%が公演1週間前にチケットを購入したと回答している。ある楽団はパンデミック以前と比較して、定期会員は8割程度になり、チケットの売り上げも2割から3割減ったと回答している。

2022年11月

概観：英国でも劇場のチケット売り上げはパンデミック以前の水準に戻っていない。美術館や映画と比較しても、劇場界は観客の戻りが緩やかだ。

英国・イングランドではまた、芸術助成団体アーツ・カウンシルが最大規模の助成プログラムであるナショナル・ポートフォリオの採択結果を発表した。英国政府がロンドン外の芸術団体助成も重視すべきだという方針を打ち出し、今回の採択にはその方針が反映されている。その結果、芸術界に大きな波紋を呼んでいる。イングリッシュ・ナショナル・オペラはロンドンから本拠地を移すことになり、新拠点はマンチェスターになると見られている。アーツ・カウンシルの方針を批判する声もあるが、同時にイングリッシュ・ナショナル・オペラとイングリッシュ・ナショナル・バレエの組織運営に対する批判もある¹⁸。

ニューヨークではニューヨーク・シアター・バレエに新監督が就任した。新監督であるステイーヴン・メレンデスいわく、ダンスは死にかけており、そうした中で新しい観客の発掘に力を入れたいと考えているという。

英国

英国政府が2022年4月から2022年6月にかけて行った調査によると、27%が過去12ヶ月に、劇場へ足を運んだと回答した¹⁹。パンデミック以前の2019年から2020年にかけての調査では、38%が演劇やミュージカル、バレエまたはオペラの公演に行くと回答している。パンデミック以前の水準と比較すると、7割程度の観客しか劇場に戻って来ていないということになる。映画館で映画を鑑賞した観客は、パンデミッ

17 Davis, Gerard "Friends" Dance Europe October/November 2022 pp.78-80

18 "Why the Arts Council should kill off ENO and ENB" The Spectator (24/09/2022)
<https://www.spectator.co.uk/article/why-the-arts-council-should-kill-off-eno-and-enb/>

19 "Theatre audiences slower to return to pre-pandemic levels than film" The Stage (25/10/2022)
<https://www.thestage.co.uk/news/theatre-audiences-slower-to-return-to-pre-pandemic-levels-than-film>

ク以前の水準と比較すると80%、また美術館等に赴いたと回答した人はパンデミック以前の水準と比較すると86%である。劇場関係者は、観客増加の流れを止めない努力を続けるが、同時に英国では生活費の高騰などのマイナス要因がある、と述べた。文化助成機関アーツ・カウンシルが最大の助成プログラムであるナショナル・ポートフォリオの採択結果を発表し、その結果が波紋を呼んでいる。英国政府は「レベル・アップ・プログラム」という、インクルーシブ（包括性）や多様性を重視する方針を掲げており、それには地方重視の姿勢も含まれている。その結果、バレエ・ブラックのような有色人種のダンサー支援を目的とした団体や、学習障害や自閉症の子供に向けて地方公演を行う団体などは、助成金が増額された。また反対にロンドンの芸術団体はおおむね助成金が削減された。ロイヤル・オペラ・ハウスは9%、イングリッシュ・ナショナル・バレエは5%の削減だった。

イングリッシュ・ナショナル・オペラはロンドンの外への芸術団体移転を支援する目的の助成金を受け、本拠地をマンチェスターに移転する予定で、同時にナショナル・ポートフォリオの枠組みから受け取る助成金はなくなった。これは組織運営を見直し、また組織規模を縮小せよという、アーツ・カウンシルからイングリッシュ・ナショナル・オペラへの通達だと見る記事もあった²⁰。

イングリッシュ・ナショナル・バレエ団芸術監督のタマラ・ロホは、こうした動きは英国全体の文化競争力を削ぐのではないか、という見方を示した。

北米

ニューヨーク・シアター・バレエは1978年に設立された比較的小規模のバレエ団だが、新芸術監督のスティーヴン・メレンデスは、作品上演に社会的意義を与えようとしている²¹。現在起きている社会問題と上演するバレエ作品との関連を説明することで、劇場に行く習慣のない観客にも、ダンスに興味を持ってもらいたいと考えているという。彼はコミュニティスペースに自ら赴き、ダンスに関する話をするなどの活動を考えている。

2022年12月

概観：コロナ禍で始まった#metoo運動は引き続き社会において大きな影響を与えており、ダンスもその影響を受けている。フランスでは社交ダンス教師が「男性」「女性」といった言葉の代わりに「先導者 (leader)」「追随者 (follower)」という言葉を使うことを拒否し、レッスンを教えていた大学を辞職するというニュースがあった。デンマークではノイマイヤー振付『オセロ』が人種差別的であるという理由で上演中止になった。スイスではバーゼル劇場バレエ学校が、バレエコースの教育内容が虐待にあたるという批判を受け、プロ養成コースを閉鎖

20 “When opera lost its voice” The Financial Times (26/11/2022)
<https://www.ft.com/content/072535ba-0b45-403e-b50c-e2bbf42dd1a5>

21 “A New leader at New York Theatre ballet and a call for new ballet audience” The New York Times (19/10/2022)
<https://www.nytimes.com/2022/10/19/arts/dance/steven-melendez-new-york-theater-ballet.html>

した。ニューヨーク・シティ・バレエ団プリンシパルのアシュリー・ボーダーがInstagram上で公開した、バレエ界のボディ・シェイミングについて語った動画は、バレエ界の闇を明らかにしたとして、欧米の一般メディアからも注目を集めている。英国・ロンドンではイスラム教徒に向けたバレエレッスンが開講されている。

英国

ロンドンではイスラム教徒のバレエ教師によって、様々な宗派のイスラム教徒が受講できるように配慮されたバレエレッスンが開講されている。例えばイスラム教のいくつかの宗派では音楽が禁止されているため、音楽の代わりに詩の朗読を行う。また女の子向けレッスンでは女性しかスタジオに出入りすることができない。

欧州

フランスのパリ政治学院では、大学内で行われている社交ダンスのレッスンでダンス教師が「女性」「男性」という言葉を使い、受講している学生から差別的であるという指摘を受けた。大学側はダンス教師に、代わりに「先導者」「追随者」という言葉を使うように求めたが、ダンス教師はそれを拒否し、大学を辞職した。この事件はフランス社会でも議論的となり、大学の姿勢は「あまりにもウォーク²²である」という批判が寄せられた²³。しかし学生側はレッスン中、きまりが悪かった上に古臭いと感じた、と述べている。また大学側も男女という2元的なジェンダーに対して心地よく思っていない学生に対してもインクルーシブでありたい、と答えた。

デンマーク・ロイヤル・バレエ団がノイマイヤー振付『オセロ』の上演を、人種差別的な場面を含むという理由で中止し、またノイマイヤーとのコラボレーションを中止した。『オセロ』にはダンサーが身体を塗り、アフリカの狩猟ダンスを踊る場面が含まれており、リハーサル段階で数名のダンサーがこれに対して拒否感を示したという。ノイマイヤー本人は、なぜこの場面が人種差別的だと考えられるのか理解に苦しむとしており、バレエ団芸術監督も自身は差別的と感じないと述べたが、同時に「若いダンサーがそのように感じているという事実に対して敬意を払った」と述べた。ノイマイヤーはバレエ団との対話を求めていたが、バレエ団側から無期限で共同の活動を停止するという通告を受けた。

スイスのバーゼル劇場バレエ学校は、プロ養成コースの教育内容が虐待だという批判を受けた結果、プロ養成コースを今年度末をもって閉鎖することを決めた。学校は以前から経営難を抱えており、虐待の告発がそれに追い打ちをかけた格好だ。30名の生徒が「リハーサル中に侮辱や罵倒を受けている」²⁴と学校を告発した。また公演に

22 ウォーク = Woke、いわゆる「意識が高すぎる」といったニュアンス

23 “Ballroom dancing teacher quits Paris university after gender row with students” RFI (12/12/2022)
<https://www.rfi.fr/en/france/20221212-ballroom-dancing-teacher-quits-paris-university-after-gender-row-with-students>

24 “Abuse accusations: Basel ballet school shuts training division” Swiss Info (01/12/2022)
<https://www.swissinfo.ch/eng/society/abuse-accusations--basel-ballet-school-shuts-training-division/48101138>

あたっても大きなプレッシャーを受け、その結果、骨折や摂食障害に悩まされていると述べた²⁵。バレエ学校監督は停職処分となった。スイスには州政府から修了資格を得ることのできるバレエ学校が2校あり、それはチューリヒ・ダンス・アカデミーとパーゼル劇場バレエ学校である。しかし2校とも同様の虐待問題で告発があった。加えてスイスのベルン市立歌劇場が擁するベルン・バレエ団においても、バレエ団員より性的虐待の告発があり、劇場側が公式に謝罪をしている。

北米

ニューヨーク・シティ・バレエ団プリンシパルのアシュリー・ボーダーはInstagram上で、自身が10代から受けてきたボディ・シェイミングについて涙ながらに語った。ボディ・シェイミングはバレエ界において慣例、もしくは制度の一部のように機能していると述べた。ボーダーは16歳の時に、出演したいならば5ポンドから10ポンド痩せる必要があると、バレエミストレスに言われたという。また今年、ニューヨーク・シティ・バレエ団で出演が予定されていた公演を直前で降板したのは、劇場幹部が公演直前になって、外見を理由として出演辞退を勧めたからだという。この投稿は「バレエの闇を暴く」といった文脈で、一般のメディアからも注目を集めた。

2023年1月

概観：オーストラリアでは伝統的なバレエ教育が抱える問題や、バレエダンサーの置かれている現状を改善しようと、様々な取り組みが行われており、また実を結んでいるようだ。オーストラリア・バレエ団ではラトロブ大学の医療専門家と共同事業を行った結果、ダンサーの怪我発生率を大きく下げること成功した。ダンサーはフィジオセラピストの指導の下でボディコンディショニングに取り組み、何か不安があれば専門家に気軽に相談できる。いかに精神的な疲労が身体的な怪我につながるのかについても調査を行っている。またオーストラリアでは多くのダンススタジオやバレエアカデミー等で、生徒のメンタルヘルスを重視し、摂食障害の発生を予防する取り組みが始まっている。生徒にダンスの技術やバレエ向きの身体を求めるだけでなく、精神的成長も促すような、包括的な教育を行うバレエ学校もある。

ロシアのウクライナ軍事侵攻を受けて、プーチン支持者であるバレエダンサーの公演を中止する動きがイタリアではあった。これは芸術ではなく政治や道義的な決断であると劇場は述べている。それと対照的に、韓国では2023年9月にロシアの国立バレエ団を招聘する予定であることが発表された。招聘元は、政治と芸術は別物であると述べている。

ファッショントレンドにおいては、バレエファッションが再燃している。TikTokを中心に始まった「バレエコア (balletcore)」と呼ばれるトレンドでは、バレリーナ風のヘアスタイルやバレエシューズ、またチュール素材を使った洋服などがトレンドの主流になりつつある。こうした服装や髪型はファッションショーのランウェイだけでなく、ゴールデン・グローブ賞授賞式

25 Ibid.

や街角でも見られるようになっていく。

欧州

イタリア・ミラノのアルチンボルディ劇場は、プーチン支持者であるウクライナ人バレエダンサー、セルゲイ・ポルーニンの公演を1月末に開催予定だったが、それを中止することを発表した。本公演は2019年に予定されていたが、新型コロナウイルスやダンサーの怪我などで延期になっていたものだ。ポルーニンの公演を開催することについて、インターネットを中心に大規模な反対運動が起こっていた。劇場側は「芸術的ではなく、政治的、また道義的責任からの決断」²⁶であると述べている。また劇場は平和主義を貫いており、そうした劇場の方針と合致しないためであると述べた。

北米

バレエコアと呼ばれるファッショントレンドが2022年よりTik Tokを中心に話題となり、バレエにインスパイアされたファッションへの関心が高まっている。チュールや髪のリボン、またバレエシューズなどがトレンドとなると予測されている。ファッションショーでブランドがそうしたファッションを取り入れたり、有名人が着用したりするだけでなく、街でも人々がそうしたアイテムを身に着けるだろうと言われている。

こうした「バレエコア」ファッションの流行で、2023年ゴールデン・グローブ賞受賞式でも、多くのセレブがバレリーナ風のお団子ヘアスタイルを披露した。バレリーナ風お団子ヘアスタイルは、うなじに近い低い位置で結うものや頭頂部に近い高い位置で作るものなど、アレンジの幅がある。

その他の地域

韓国ではロシアの国立バレエ団が2023年9月に『白鳥の湖』公演を開催することが発表された。ソウルと地方で公演を開催予定であり、バレエ団はすでにロシア政府から海外公演の許可を得ている。こうした動きに対して批判もあるが、招聘元は「政治と芸術は別である」²⁷との見解を示した。

またオーストラリアではバレエダンサーやバレエ教育の現状をよりよくするため、様々な取り組みが行われている。The Sydney Morning Heraldによれば、オーストラリア・バレエ団はラトロブ大学と戦略的パートナーシップを提携した結果、ダンサーの怪我発生率を大きく下げることになった²⁸。ダンサーには怪我が重症になる

26 “Milano, cancellato lo spettacolo del ballerino filorusso Polunin agli Arcimboldi” Corriere Della Sera (31/12/2022)
https://milano.corriere.it/notizie/cronaca/22_dicembre_30/milano-cancellato-lo-spettacolo-del-ballerino-filorusso-polunin-agli-arcimboldi-a221955e-adb5-4118-921b-df72bf04dxlk.shtml
 27 “ロシアの国立バレエ団が9月来韓公演 懸念あるも「政治と芸術は別」” Yonhap News (04/01/2023)
<https://jp.yna.co.kr/view/AJP20230104002800882>
 28 “How The Australian Ballet is drastically cutting injury rates” Sydney Morning Herald (14/12/2022)
<https://www.smh.com.au/culture/dance/how-the-australian-ballet-is-drastically-cutting-injury-rates-20221205-p5c3qo.html>

前、何らかの違和感があった時点で専門家に報告するように教育を徹底した。加えてダンサーはフィジオセラピストの監督下でボディコンディショニングを行い、日々のリハーサルや公演に向けて身体の調整をする。こうした怪我予防対策を行った結果、ダンサーは身体的だけでなく精神的な面でも向上が見られたという。かつてはダンサーの健康と言えば怪我の治療についてだったが、現在は変化し、怪我の予防やメンタルヘルス等が議論の中心になっているという。

またABC Newsによれば、オーストラリアでは多くのダンサーが摂食障害やメンタルヘルスの悪化に悩む現状を受け、新たな取り組みを行うバレエ学校やダンススクールが現れはじめた²⁹。そもそもダンサー、特にバレエダンサーは摂食障害に悩む率が高い。オーストラリアのいくつかのバレエ学校やダンススタジオではこうした現状を受け、ダンスの技術や外見だけでなく、まず人間として生徒を教育する包括的な教育方針を導入し始めた。個々の違いを前提とし、生徒の身体的だけでなく精神的な成長を促すような教育である。こうした教育はダンスの技術を伸ばすという点においても効果的であるという。

29 “Ballet was Catherine's entire life, but it caused her years of ‘irreparable’ damage. Now she's making sure the next generation is better off” ABC News (22/01/2023)
<https://www.abc.net.au/news/2023-01-22/ballet-dancing-trauma-eating-disorders-mental-health-education/101822092>